

「地域人材育成プラットフォーム」における 「かごしま地域リサーチ・プログラム」の現状と課題

伊藤 奈賀子・石走 知子・出口 英樹・大前 慶和

キーワード：地域人材の育成、学士の質保証、体系的カリキュラム

概要

鹿児島大学は、2017年度より地域人材育成のための学部横断型「地域人材育成プラットフォーム」の運用を行っている。本研究の目的は、このうち特に「かごしま地域リサーチ・プログラム」に着目してその理念と現状について述べたうえで、地域と連携した探究活動を行う教育プログラムを運営する際に生じる課題とその解決に向けた展望を明らかにすることにある。

「かごしま地域リサーチ・プログラム」の目的は、地域の「歴史」「伝統文化」「自然環境」等の特性と課題について多様な視点から理解を深め、自身が暮らす地域の発展に寄与する能力の育成を図ることである。地域資源や地域課題を教材として、学際的・多角的に探究する力の育成を目指す。地域課題の発見・探究については、昨今我が国の高等教育において地域を冠する学部の設置が相次いだことから明らかなように、関心が高まっている学習活動及び育成すべき能力の1つとして位置づけられている。「かごしま地域リサーチ・プログラム」もそのような流れの中に位置づけられる一方、適切な方法論に基づく探究方法の修得を重視しているという点で違いも見られる。

「かごしま地域リサーチ・プログラム」は2019年度に全ての構成科目が開講され、最初の修了生を輩出する。本稿ではその中でも特に、「かごしま地域リサーチ・プログラム」受講の意思表明の機能を持ったスタートアップ科目である「地域リサーチ・スタートアップ」と、プログラムの中核を担うコア科目である「地域リサーチ・トライアル」に注目し、その現状と課題を指摘したい。

「地域リサーチ・スタートアップ」は、地域課題の発見・探究を柱として運営されてきた、文字通り「かごしま地域リサーチ・プログラム」のスタートアップ科目である初年次後期配当科目である。この科目は、学生の地域への関心を高めると同時に、地域課題に対する探究方法修得にも一定の貢献を果たしてきたといえる。しかし、その一方、「かごしま地域リサーチ・プログラム」のカリキュラム全体における科目の位置づけからすると、学習事項の多さと目標の水準が高すぎる懸念があった。具体的には、必ずしも県内出身ではなく地域課題に対する知識も不十分なうえ、まだ自身が専門としようとしている分野の学問的方法論もほとんど身に付けていない初年次の学生にとって、自ら地域課題を発見、探究するのは困難ではないかと考えられた。この課題を踏まえ、2019年度には授業計画を改めた。

「地域リサーチ・トライアル」は、「かごしま地域リサーチ・プログラム」を最も特徴付ける科目の1つである。プログラム科目の中でもコア科目として位置づけられ、実際にフィールドにて調査活動を行うことを授業内容としている。2019年度に新規開講されたコア科目が「地域リサーチ・トライアル」であり、大島紬産業の復興をテーマに掲げ、奄美大島にてヒアリング調査、実地調査を中心にリサーチ活動を実施した。

いずれの科目においても、明確な授業テーマを授業担当教員から提示し、受講生はその方向性にしたがってリサーチ活動を行う点が特徴であると言える。

I. 「地域人材育成プラットフォーム」の理念と設置の背景

本研究の目的は、鹿児島大学が2017年度に開設した「地域人材育成プラットフォーム」のうち、特に「かごしま地域リサーチ・プログラム」の理念を示したうえで、現時点までに明らかになった課題とその解決に向けた取り組みを示し、今後の展望を明らかにすることである。

近年、特に地方大学においては立地する地域における知の拠点としての役割が高まっている。2013及び2014年度の「地（知）の拠点整備事業」や2015年度の「地（知）の拠点大学による地方創生支援事業」はそうした動きを明確に示すものといえる¹。この流れの中で、私立大学だけでなく、私立大学と比べ学部改組がさほど行われない国立大学においても相次いで地域系学部の新設が相次いだ²。

しかし、鹿児島大学はこのような選択をせず、学部ごとの専門性を尊重したうえで、どの学部に入學した学生も各々の関心に基づいて地域に関する学びを選択できる学部横断型の学びを準備することとした。その際、地域に関する知識の獲得以上に、専門性を問わず学士の基礎として求められる汎用的能力の修得を重視した教育プログラムを構築することとした。これが「地域人材育成プラットフォーム」である。「地域人材育成プラットフォーム」は、「地域の知の拠点」としての役割を担う鹿児島大学における地域人材育成の核となる取り組みである。

「地域人材育成プラットフォーム」は、図1の模式図で表されたカリキュラムからなるものであり、合計20単位を修得することによって修了となる。各科目はそれぞれカリキュラム内で明確な位置づけを与えられていることから、学生は明確な階梯性に基づいて履修する。カリキュラムの基本的な構成要素はスコープ（範囲）とシークエンス（順次性）であるが、「地域人材育成プラットフォーム」においては、地域資源や地域課題がスコープにあたり、それらを教材とした学習を順次進めていく。

カリキュラム図上、学生は下から上に学びを進めていくことになり、教育プログラムの基盤として最下位にあるのが全学必修科目である「大学と地域」である。これを起点として共通教育における地域志向科目の中から各々の関心に応じた科目を履修するほか、「プログラム・スタートアップ科目」において各プログラムについての学習に取り組む。その後、各プログラムの方向性を明確に体现するコア科目や自身が所属する学部とは異なる学部の専門科目が含まれる「プログラム科目」を履修する一方、各プログラムの特色を踏まえた「実地体験事前演習」「実地体験」に参加し、最終的に「プログラム修了演習」において自身の学びを総括することとなる。学生はこの過程で徐々にスコープを焦点化していくこととなる。また、教室での大人数授業である「大学と地域」から、自ら課題設定や探究活動が求められるコア科目や個々の活動が中心となる「実地体験」を経て最終成果を明らかにする「プログラム修了演習」という一連の流れが学修のシークエンスを示している。

なお、ここに挙げた「プログラム科目」に含まれる「コア科目」と「実地体験事前演習」「実地体験」「プログラム修了演習」については、既存の「共通教育科目」「専門教育科目」とはいささか異なる枠組みとして新たに「高度共通教育科目」を創設した。「高度共通教育科目」は2年次以上の学生を対象として学部横断的に開講されるものであり、その意味では共通教育に当たる。しかし、その単位は共通教育に関する卒業要件単位に含まれることはなく、各学部の規定に基づき専門教育科目として認定されるものである。

¹ COC 事業及びCOC+ 事業の概要については以下を参照されたい。http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kaikaku/coc/（2019.11.11閲覧）

² こうした国立大学の動きについては、伊藤（2017）、伊藤（2018）を参照されたい。なお、「地域系学部」についても上記文献内で説明しているが、「地域」を冠した学部のほか、学部名称に「地域」の文言はないものの、その教育目標及びDPにおいて明確に地域人材の育成をうたっている学部を総称したものである。後者の具体的事例としては、愛媛大学社会共創学部がある。



図1 「地域人材育成プラットフォーム」のカリキュラム図

II. 「かごしま地域リサーチ・プログラム」の現状

前述のとおり、「地域人材育成プラットフォーム」には3つの教育プログラムがあり、「かごしま地域リサーチ・プログラム」はその1つである。「かごしま地域リサーチ・プログラム」は、地域の歴史や伝統文化、自然環境等の特性と課題について多様な視点から理解を深め、自身が暮らす地域の発展に寄与する能力の育成を図ることを目的とする。地域資源や地域課題を教材として、学際的・多角的に探究する力の育成を目指すものであり、伝統工芸品や郷土の歴史、主な農水畜産物や観光産業など、対象として取り上げる地域資源や地域課題は非常に多岐にわたる。

なお、「かごしま地域リサーチ・プログラム」以外の2つの教育プログラムとは、地元就業をめざした人材育成を行う「かごしまキャリア教育プログラム」と、英語による教育と海外派遣などの交流経験を通じてグローバルな視点から思考・行動できる人材の育成を目指す「かごしまグローバル教育プログラム」である。「地域人材育成プラットフォーム」における「かごしま地域リサーチ・プログラム」は他のプログラムと比較した場合、2つの点で違いがある。

第1に、その目標として卒業後の進路を方向付けることを視野に入れていないという点である。この点は特に、地元就業を進路として想定する「かごしまキャリア教育プログラム」との間で大きな差異となっている。また、「かごしまグローバル教育プログラム」についても、英語による学習や短期海外派遣が実地体験として含まれることから、語学力や国際交流などをキーワードとしたキャリア形成を視野に入れていると考えられる。これらに対して「かごしま地域リサーチ・プログラム」は、地域資源及び地域課題の探究とキャリア形成との接合は一義的には想定されていない。

第2に、これまでの鹿児島大学における取り組みとは全く異なる新たな視点に基づくものであるという点である。「かごしまキャリア教育プログラム」におけるキャリア教育及びキャリア形成という視点や、「かごしまグローバル教育プログラム」におけるグローバルな視点や思考力の育成という観点はこれまでの鹿児島大学の教育においても含まれていたものである。このことは、「かごしまキャリア教育プログラム」及び「かごしまグローバル教育プログラム」における実地体験が既存のインターンシップや短期海外派遣と重なる部分を持つことから明らかである。これに対して「かごしま地域リサーチ・プログラム」は、地域課題の発見・探究そのものに取り組むものであり、基礎となる取り組みは存在しなかった。

このように鹿児島大学における新たな試みとして運用を開始した「かごしま地域リサーチ・プログラム」は、以下の3つを目標としている。

- ① 地域資源を学際的・多角的に探究する態度と能力

- ② 地域について現実に則した分析をする能力
- ③ 専門性や関心の異なる他者と協働して、具体的な地域の課題を発見し解決する能力

3つの目標のうち、①及び②については、地域課題の発見・探究を主たる学習活動と位置付ける「かごしま地域リサーチ・プログラム」の特性を明確に示すものである。鹿児島大学では、鹿児島県内出身者と県外出身者の割合が例年半数程度ずつとなっている³。鹿児島の地域資源については、県外出身者はもちろんのこと、県内出身者であっても十分な知識を持っているとは限らない。特に地方において一般的に課題とされることの多い少子高齢化や第一次産業を取り巻く後継者問題等について、いくらかの知識を有する場合はある。しかし、自身が生活する地域の実態に対する精緻な分析を試みたり、地域資源について一定の学術的専門性に基づく探究活動を行ったりした経験のある学生は少ない。そうした状況を踏まえて「かごしま地域リサーチ・プログラム」では、基盤にある「大学と地域」やスタートアップ科目である「地域リサーチ・スタートアップ」から徐々に地域課題に対する探究活動に取り組み、その活動を通して上記の能力育成を図ることとしている。

一方、③は、学部横断型の教育プログラムという「地域人材育成プラットフォーム」の特性を踏まえたものであり、その意味では他の2つの教育プログラムとも共通する要素を持つ。「かごしま地域リサーチ・プログラム」の場合、全学必修科目である「大学と地域」では、中間レポートや最終レポート等の機会に各自で重要と考えられる地域課題について意見を述べる機会はあるものの、個々に研究課題を設定して探究活動を行うものではない。また、「地域リサーチ・スタートアップ」においても、後述のとおり、現在は各自が研究課題を設定して探究活動に取り組む方式は採用していない。これは、より高い学習成果を目指したカリキュラム改革と受講者数増という状況への対応によるものである。その結果、個々に行った課題設定に基づく探究活動は、「地域リサーチ・トライアル」から事実上開始される。

実際の探究活動は各々が独自の課題設定を行うため協働で行うとは限らない。しかし、地域課題という必ずしも専門領域を規定しない探究活動においては、異なる視点や関心を持つ他者からの意見や疑問が重要な意味を持つと考えられる。「地域リサーチ・トライアル」においてもこの点を重視しており、個々に研究課題を設定していながらも、上記の目標を掲げ、その達成に向けて他者との協働に基づく探究活動を意図的に取り入れているのである。

このような目標に到達するために構築された「かごしま地域リサーチ・プログラム」のカリキュラムが図2である。基本的な構成は図1に示した「地域人材育成プラットフォーム」のカリキュラムに則っており、この枠組みに基づいて構築されている。このうち、特に「かごしま地域リサーチ・プログラム」の趣旨を体現する科目が「地域リサーチ・スタートアップ」と「地域リサーチ・トライアル」であることから、以下2章でそれぞれの詳細について述べる。



図2 「かごしま地域リサーチ・プログラム」のカリキュラム図

Ⅲ. 「かごしま地域リサーチ・プログラム」構成科目の目的と現状

1. 「地域リサーチ・スタートアップ」の目的と現状

「地域リサーチ・スタートアップ」は、「地域人材育成プラットフォーム」におけるスタートアップ科目の位置にある。つまり、この履修をもって「かごしま地域リサーチ・プログラム」受講の意思表示とみなされる科目である。この前段階として受講される「大学と地域」は全学必修科目のため全ての学生が履修する。また、地域志向科目は特定の科目ではなく、共通教育のうち特に地域資源や地域課題をコンテンツとして取り上げている科目の総称であるため、学生によって履修科目が異なる。こうしたことから、「かごしま地域リサーチ・プログラム」固有の科目として最初に履修するのが「地域リサーチ・スタートアップ」であることによる。

「地域リサーチ・スタートアップ」は2017年度の「かごしま地域リサーチ・プログラム」開設に合わせて新設された科目であり、当初の目標及び授業計画は下記の通りであった。配当年次は初年次後期であり、これは基本的にスタートアップ科目に共通する位置づけである。

- 鹿児島県の歴史・伝統・文化・自然についての的確に把握できる。
- 上記の把握を踏まえて、適切な課題設定ができる。
- 設定した課題について、適切な方法で探究できる。

表1 2017-2018年度「地域リサーチ・スタートアップ」授業計画

	内 容
1	オリエンテーション
2	鹿児島県の現状や地域の取り組みについて知ろう (1)
3	鹿児島県の現状や地域の取り組みについて知ろう (2)
4	鹿児島県の現状や地域の取り組みについて知ろう (3)
5	テーマ設定と探究の方法論を知ろう (1)
6	テーマ設定と探究の方法論を知ろう (2)
7	テーマ設定と探究の方法論を知ろう (3)
8	リサーチ活動 (1)
9	リサーチ活動 (2)
10	中間プレゼンテーション
11	リサーチ活動 (3)
12	リサーチ活動 (4)
13	地域リサーチ活動のまとめ
14	最終プレゼンテーション (1)
15	最終プレゼンテーション (2)、授業の振り返り

上記の目標を踏まえ、授業は計画に沿って学生自身がそれぞれの関心に応じて課題を設定し、初歩的な探究活動を行う方式で運営された。課題設定に先立つ第2～4回はそれぞれのテーマに関する話題提供を行い、学生が関心を深め、テーマを設定することを補助することとした。この方式は2018年度まで2年間継続し、学生は地域課題とその探究方法という双方の多様性について理解を深めた。学生の満足度も高く、その成果についても大きな問題が生じたわけではない。

しかし、学習の体系性という観点からは問題があった。「地域リサーチ・スタートアップ」は初年次後期配当科目であることから、学生は自らが専門としようとしている学問領域に関しても

³ 詳細は2019年度鹿児島大学概要を参照されたい。

https://www.kagoshima-u.ac.jp/about/%E2%91%A3nyuugakusyasuu_gakubu.pdf (2019.11.11閲覧)

まだ全く方法論を修得していない状況にある。このため、核となる方法論を知らないまま様々な方法論に関する知識を与えられることになり、与えられた方法論の適切性を相対的に判断することが困難である。結果として学生は学修目標を十分に達成することが難しくなる。

また、実際に教育プログラムを運用していく中で、学生自身が探究すべきテーマを設定することについても問題が生じた。詳しくは後述するが、この後に接続する「地域リサーチ・トライアル」の運営方法には設計当初の段階から変更が加わった。このため、これに合わせる形で前段階の受講科目である「地域リサーチ・スタートアップ」の運営方法にも修正の必要性が生じた。

このような背景を踏まえ、2019年度からは目標及び授業計画を見直した。それぞれを以下に示す。

- 多様な地域リサーチの方法について、その概要を説明できる。
- ある地域課題に対し、自分の課題意識に見合ったりサーチ方法を案出することができる。

表2 2019年度「地域リサーチ・スタートアップ」授業計画

	内 容
1	オリエンテーション
2	地域課題 1【伝統工芸品】×若者への PR・後継者問題
3	地域課題 1【伝統工芸品】×生活様式の変化
4	地域課題 2【歴史・文化】×郷土の教育・偉人物語
5	地域課題 2【歴史・文化】×歴史観光施設・博物館
6	地域課題 3【環境】×鹿児島島の自然・島嶼
7	地域課題 3【環境】×再生可能エネルギー・持続可能な社会
8	実地見学 1「新日本科学：メディアポリスの取り組み」
9	実地見学 2「新日本科学：地熱発電所」
10	中間まとめ
11	地域課題 4【防災】×自然環境の特性
12	地域課題 4【防災】×避難時の課題・政策立案
13	地域課題 5【まちおこし・まちづくり】×地域の PR
14	地域課題 5【まちおこし・まちづくり】×地域おこし協力隊の活動・学生の取組
15	全体のまとめと振り返り

授業計画の見直しに当たって重視したのは、「かごしま地域リサーチ・プログラム」の体系的カリキュラムにおける「地域リサーチ・スタートアップ」の位置づけである。目標については、それまでより水準を下げ、初年次の学生でも到達可能なものとすることを意識した。また、授業計画については、地域課題に対する多様なアプローチ法に関する情報提供に比重を置き、学生自身による課題設定と探究についてはその後に接続する科目、具体的には、「地域リサーチ・トライアル」と「地域リサーチ実習」の課題とした。なお、「地域リサーチ・トライアル」については次章において詳述する。情報提供については、全学必修科目である「大学と地域」からの接続を意識し、これまでも話題提供を行ってきた伝統工芸品や歴史・文化に加え、防災やまちおこし・まちづくりを取り上げることとした。

目標達成に向けた学習活動としては、話題提供を受けたうえでそのリサーチ方法の特徴について思考を促す活動を取り入れる。その際、ペアやグループでのディスカッションを取り入れることにより、協働での学びを積極的に促す。そうした履歴については鹿児島大学の学習管理システム manaba⁴にポートフォリオとして蓄積し、修了者に交付する学修履歴書に活用する⁵。

⁴ manaba は朝日ネットが提供する学習管理システムである。鹿児島大学では、2017年度10月より施行的に導入を開始し、2018年度から本格的に稼働している。

資料1 新日本科学メディアポリス及び地熱発電所の見学



2. 「地域リサーチ・トライアル」の目的と現状

「地域リサーチ・トライアル」はプログラム科目のうちコア科目にあたる。2年次の履修が想定されるため、2018年度からの授業提供を計画していた。当初のカリキュラム案では、「地域リサーチ・スタートアップ」にて各自がリサーチ・テーマを設定し、そのリサーチ・テーマにしたがってより深くリサーチ活動を行うのがコア科目の内容であった。コア科目における受講生によるリサーチ活動には授業担当教員の引率を想定せず、受講生の主体性を基盤とする予定であった。ただし、リサーチ活動の報告を毎日eメール等で課すことにより、リサーチ活動そのものに対する助言、指導を行う他、2単位にふさわしい活動時間の確保を目指していた。

しかしながら、このカリキュラムにはやや無理があった点は前述の通りである。すなわち、専門性を未だ深められていない初年次の学生が「地域リサーチ・スタートアップ」にてリサーチ・テーマを設定することが困難であったことから、したがって受講生の主体性を基礎とするコア科目の構想も再検討が必要となったのである。以下、2018年度および2019年度のコア科目について論じる。

2018年度は、法文学部開設の専門教育科目「アクティブ・ゼミ」を「かごしま地域リサーチ・プログラム」のコア科目に指定した。同科目は2016年度にパイロット授業として共通教育で開設されており、2017年度からは「アクティブ・ゼミ」として専門教育にて提供されるようになった。同科目は授業担当教員が明確な活動目的を示す点に特徴がある。具体的には、鹿児島県出水市と連携し、インバウンドの視点から地域活性化策を提言しようというものであった。宿泊を伴う現地フィールドワークが複数回組み込まれていたが、教員が引率するスタイルをとっていた。

一方、受講生に目を転じるならば、授業では様々なグループ活動をこなしていくのであるが、この過程で必然的に受講生自らがサブ・テーマを設定することとなる点に注目したい。つまり、当初のコア科目の構想である「リサーチ・テーマの全てを受講生自らが設定する」のではなく、「アクティブ・ゼミ」では「活動目標として授業担当教員によって掲げられた活動テーマを前提に、サブ・テーマを受講生自らが設定する」スタイルで授業が展開されていたのである。

このようなスタイルをとるアクティブ・ゼミがコア科目に最もふさわしいと考え、2018年度のコア科目として指定することとなった。本来であれば、総合教育機構自らがコア科目の提供主体となるべきところではあるが、予想受講者数が1名であったことに加え、総合教育機構の授業開設準備が間に合わなかったことから、コア科目の指定という手段を選択した。

コア科目「地域リサーチ・トライアル」の目標は以下の4点である。

⁵ 「地域人材育成プラットフォーム」修了者に交付するものであり、学士課程におけるディプロマ・サプリメント同様、「地域人材育成プラットフォーム」の能力要件に基づき、修了した学生が実際に身に付けた能力をより具体的に示すものである。

- 必要とする情報を収集するのに適した調査手法を活用できる。
- 他の受講生との協働ができるようになる。
- 調査を計画し合理的に実行できるようになる。
- 地域の抱える課題について認識を深め、解決に向けた調査研究の基礎を築く。

この科目については、2年次に受講するコア科目であること、また「地域リサーチ・スタートアップ」との接続の観点から、アクティブ・ゼミの授業スタイルを参考に設計し直した。

まず、受講生が自由に各所でリサーチ活動を進めるのではなく、教員が大きなテーマを示すこととした。「かごしま地域リサーチ・プログラム」では以前から伝統的工芸品産業の次世代への継承問題を取り扱っていたこと、また離島における教育プログラムの構築が鹿児島大学の戦略であったことから、奄美大島をフィールドとし、大島紬の復興を取り上げることにした。この時、授業担当教員の事前調査から生じたアイデアにドメスティック・フェアトレードという視点があり、これを受講生全員と共有することとした。

その上で、実際に履修登録を行った4名の学生と事前の打ち合わせを行い、各人がサブ・テーマを掲げることとなった。具体的には、「大島紬の海外展開」、「奄美大島の自然を活用した大島紬の革新と活用」、「新たなPR方法の開発」、「エンジニアの視点からの大島紬産業の考察」であった。

フィールドワークは、2019年9月3日～5日の2泊3日で実施した。全員が同じ行程で調査を進めた。受講者数4名に対し、引率教員は3名の体制をとった。フィールドワークのスケジュールを表3に示す。なお、これらの調査スケジュールは全て授業担当教員によってつくられている。

表3 「地域リサーチ・トライアル」におけるフィールドワークスケジュール

9/3 (火)	事項	調査の視点
10:10	鹿児島空港発	
11:30-12:30	奄美パーク	奄美大島の自然、文化、歴史等全般を理解する
13:45-14:45	夢おりの郷	クラウドファンディングの利用など、新しい動きについてヒアリング調査を行う
15:40-17:30	黒潮の森 マングローブパーク	奄美大島の自然について体験を通じて理解し、大島紬と自然との関係性を考察する
9/4 (水)		
9:00-11:30	本場奄美大島紬協同組合	織り子（職人）さんの養成の場を視察し、職人さんへのヒアリング調査を行う
13:00-14:30	大島紬村	観光資源としての大島紬の活用方法を徴すると共に、観光施設建設のねらいなどをヒアリング調査する
14:45-16:30	金井工芸	染色工程を体験すると共に、海外進出等のねらいをヒアリング調査する
9/5 (木)		
9:00-10:15	興紬商店	大島紬の流通を理解すると共に、新製品開発などに関するヒアリング調査を行う
10:30-12:00	町田酒造工場見学	奄美群島のみ許可される黒糖焼酎の製造現場を見学し、奄美大島への理解を深める
13:00-14:15	はじめ商事	大島紬の新しい用途開発などについてヒアリング調査を行う
14:30-16:00	奄美市役所紬観光課と意見交換	奄美市の政策についてヒアリング調査を行い、意見交換を実施する
19:50	鹿児島空港着、解散	

資料2 フィールドワークの様子



学生達は活動体験やインタビュー調査を中心に、それぞれのサブ・テーマに応じた資料収集や聞き取りの機会を得て、その情報を基に、移動中の車の中でもディスカッションを行うなど熱心に活動に取り組んだ。

フィールドワーク終了後には活動の振り返りを行ったが、調査前の課題意識は実際に現地での体験や収集した情報を加えて、現実感のある再構築がなされ、また発展させた意欲ある考察が述べられていた。最初に設定したサブ・テーマは所属学部ならではの視点も入っているが、この点も反映された発表ができており、学部を越えて影響を受け合う機会になっていると思われた。適した調査手法での情報収集を、学部を越えた仲間と合理的に進め、地域の抱える課題の認識と考察にまで至ったことから、「地域リサーチ・トライアル」における目標は達成されたと思われ、「かごしま地域リサーチ・プログラム」の3つの目標をも満たす効果を得たと考える。

IV. 「かごしま地域リサーチ・プログラム」の課題

前述の通り、カリキュラムにはスコープとシーケンスという基本的な要素が必要であり、それは学士課程全体ではなく一定の範囲を持つ教育プログラムにも当てはまる。「地域リサーチ・プログラム」においては、ここで扱われるべきスコープをどのような観点から設定し、その範囲内でシーケンスをいかに担保するかが大きな課題である。

「地域リサーチ・スタートアップ」では、当初は学生自身がテーマ設定を行うこととしていたものの、開講から3年目でこの点を変更した。これに合わせる形で「地域リサーチ・トライアル」では、別授業での経験も踏まえつつ、教員がメイン・テーマを設定し、その範囲内で学生がサブ・テーマを設定することとした。

この問題は、学生自ら自身が取り組むべきテーマを、カリキュラムのどの段階で設定すべきかという観点から考える必要がある。両科目はいずれも「かごしま地域リサーチ・プログラム」という体系的な教育プログラムの構成科目であるためである。学生が自身の関心に基づきテーマを設定してそれに関する学修に取り組むことには一定の意義が認められるものの、基礎となる知識が十分でない段階では適切な内容及びレベルのテーマを考え出すことそのものが非常に難しい。

鹿児島大学では初年次学生を対象とした全学必修科目である「初年次セミナー」において自らテーマを設定してそれに関する情報を集め、論証型レポートを作成するという一連の学習活動を課しているが、多くの学生がつまづくのはこの点である。それでも初年次の学生にこの活動を課しているのは、その経験を通じてテーマを適切に設定することの難しさや前提となる知識の必要性・重要性を理解させるという意図に基づいている。

それでは、学士課程の一部に組み込まれた教育プログラムである「かごしま地域リサーチ・プログラム」においてもこの考えを当てはめることは可能か。

「かごしま地域リサーチ・プログラム」の集大成として位置づけられているのは「地域リサーチ実習」では、テーマ設定の主体は明らかに学生である。このため、ここで予定されている実習を円滑に行い、十分な成果を挙げられるだけの能力を養うことが、その前段階に位置づけられた科目の目標でもある。適切なテーマ設定についても、こうした観点から考える必要がある。

体系的に適切なテーマ設定を行う能力を育成すると考えた場合、当初の「地域リサーチ・スタートアップ」のように十分な知識を持たない初年次の学生にそれをさせるのは、適切とは言い難い側面があった。経験させることそのものの意義も認められはするものの、同時期に「初年次セミナー」において同様の学習活動をしているさなかにあえて「地域リサーチ・スタートアップ」でも経験させる必要があるとまでは考えにくい。

これに対し、改革後の「地域リサーチ・スタートアップ」と「地域リサーチ・トライアル」では、テーマ設定の主体を徐々に教員から学生に移し、最終的に「地域リサーチ実習」で学生にほぼ全てを委ねる形となった。それは、「初年次セミナー」を初めとする学士課程全体のカリキュラムからしてもより適切といえるだろう。

V. 今後の展望

「かごしま地域リサーチ・プログラム」では地域資源や地域課題の探究を行うこととしているが、その場合の対象となるフィールドについては何ら定められていない。このため、歴史・文化や伝統工芸品、環境、防災など、極めて多様なテーマを設定して探究活動に取り組むことが可能である。実際に地域資源も地域課題も多様であるため、実態を反映しているともいえる。

その一方、カリキュラム上、「地域リサーチ実習」において集大成としての探究活動を学生自らが行うため、そこに向けて対象範囲を絞り込んでいかなければならないという側面もある。2019年度の場合、「地域リサーチ実習」のフィールドは、前述の通り様々な観点からの検討を踏まえて奄美大島と決定された。このため、探究活動も奄美大島をフィールドとするという前提で検討されることとなった。

今回は、「地域リサーチ実習」を受講する学生が以前より奄美大島、中でも大島紬に強い関心を示していたことから、決定されたフィールドと学生の関心とが一致しており全く問題は生じなかった。しかし、今後受講する学生が増加し、関心が多様化すれば、準備されたフィールドと学生の関心とにずれが生じる可能性がある。

こうした問題を避けるには複数のフィールドを準備する必要がある。「地域リサーチ・トライアル」については、前述の通りプログラムにおけるシークエンスの担保という観点から一定程度教員が関与する形で学習活動を行うことが必要であり、受講学生数次第では複数である必然性は薄い。これに対して「地域リサーチ実習」は、学生が主体的に探究活動を行うことが想定された科目である。これは、「地域リサーチ実習」が「かごしま地域リサーチ・プログラム」における学習活動の集大成的位置づけにあることによる。このため、本来的には学生が個々の関心に基づいてフィールドを探し出すべきとみることでもできる。しかしその場合、学習や教育の質をいかに保証するかという問題が生じる。「かごしま地域リサーチ・プログラム」は教育プログラムであると同時に学士課程の一部に埋め込まれているため、単位の質保証は必須である。

このような状況を踏まえ、今後についてはフィールドの拡充を予定している。2019年度に「地域リサーチ・トライアル」と「地域リサーチ実習」のフィールドとした奄美大島以外にそれとは異なる特徴を有する候補地を2,3カ所選定し、調整を進めており、2020年度以降については、新たなフィールドでの実習を行う可能性も想定している。

しかし、フィールドの拡充は教員にとっては負荷の増大にもつながる側面がある。「地域リサーチ・トライアル」と「地域リサーチ実習」とで多少の違いはあるものの、教員が主体となり、そ

のテーマの選択における事前調査や、調査対象や調査スケジュールなどの具体的な計画立案まで行わなければならない、現段階でも負担は大きいものとなっている。しかし、地域人材育成を担う総合教育機構の教員として、地域を意識した教育活動やPBL教育を指導できる機会となり、大学教員としての教育力向上のためのFD活動ともなり得ると考えられる。

さらには、教育力のみならず研究を発展させる動力ともなり得るのではないか。地域をフィールドとすることでこれまでとは異なる研究の素材を発見できるほか、新たな教育方法を採用した成果を検証するなどの研究活動も考えられる。特に「かごしま地域リサーチ・プログラム」に関していえば、地域課題の発見に取り組んでいることから、研究活動を通じてその解決が図れる課題もあると考えられる。これは、地域人材の育成という「地域人材育成プラットフォーム」本来の目的とは異なるアプローチでの地域貢献として重要な意味を持つものといえる。

また、教育とも研究とも異なる側面として、学生同士、特に先輩学生と後輩学生の共同での学びを通じて得られる成果についても指摘しておきたい。2019年度は、受講学生数等の関係もあり、「地域リサーチ・トライアル」と「地域リサーチ実習」を合同で実施した。それにより、「地域リサーチ実習」を受講する3年生が「地域リサーチ・トライアル」を受講する2年生に対して指導を行う場面が見られた。近年、学生同士の支え合いや学び合いを通じてより高い能力の育成を図ったり、大学生活への適応を促したりするピア・サポートや協働学習が多くの大学において行われている。「地域リサーチ・トライアル」と「地域リサーチ実習」は別々の科目であるものの、合同で実施することによって得られる学習成果もあると考えられることから、今後のフィールド選定の際にはこの点も考慮する必要があるだろう。

参考文献

- 出口英樹・牧野暁世（2016）「鹿児島大学における地域志向科目の現状」鹿児島大学『鹿児島大学 教育センター年報』第13号、pp.10-21
- 出口英樹・酒井佑輔・大前慶和（2018）「『学士たる地域人材』を養成するディシプリン横断型教育プログラム—学士課程における『横串』としての地域志向教育の効果と課題—」鹿児島大学『鹿児島大学 総合教育機構 紀要』創刊号、pp.35-51
- 飯干明・出口英樹・伊藤奈賀子（2016）「鹿児島大学における地域志向科目の展望」鹿児島大学『鹿児島大学 教育センター年報』第13号、pp.22-28
- 伊藤奈賀子（2016）「鹿児島大学における地域志向教育の沿革」鹿児島大学『鹿児島大学 教育センター年報』第13号、pp.3-9
- 伊藤奈賀子（2018）「地域系学部におけるカリキュラムの特徴と体系的—国立大学の地域系学部に着目して—」『鹿児島大学総合教育機構紀要』創刊号、pp.20-34
- 伊藤奈賀子（2019）「地域人材育成を目指す体系的カリキュラム構築上の課題」『鹿児島大学 総合教育機構紀要』第2号、pp.1-16

The Current Status and Issues of Inter-Disciplinary Program for
Regional Research at Kagoshima University

ITO Nagako, ISHIBASHIRI Tomoko, OMAE Yoshikazu, DEGUCHI Hideki

Keywords:

Regional Talents as Bachelors, Systematic Curriculums of the Education Programs for Regional Talents, Quality Assurance of the Bachelors

Since 2017, Kagoshima University has established an undergraduate inter-disciplinary education programs for regional talents as bachelors. One of them is the “Kagoshima Regional Research Program” . The program includes some exploration activities linked to the region or the community

The goal of the “Kagoshima Regional Research Program” is to foster the ability to contribute to the region or the community, deepening the understanding of region's “history” , “traditional culture” and “natural environment” from various perspectives.

In 2019, the “Kagoshima Regional Research Program” offered all the components, and produced the first completion students. In this article, we verified the “Regional Research Startup” , which is the startup subject of the “Kagoshima Regional Research Program” , and the “Regional Research Trial” , which is the core subject of the program. We would pay attention and point out the current situation and issues of them.

"Regional Research Startup" is the startup subject of the "Kagoshima Regional Research Program", which has been operated based on the discovery and research the regional issues. It can be said that this subject has contributed to the acquisition of research methods for regional issues.

“Regional Research Trial” is the core subject of the “Kagoshima Regional Research Program” and is one of the subjects that characterize the program most. The content of the class is to actually conduct research activities in the field.

The purpose of this paper is to clarify the issues and perspectives of the “Kagoshima Regional Research Program” by verifying the 2 subjects above.